

囚人番号 167932D

—その男はカナダ ドナコーナ刑務所にいた—

荒井 正行

十年前、応力拡大係数の三次元問題を解くことに熱中していた時があった。二次元問題についてはそのほとんどが解かれていたが、三次元問題は数学的な取り扱いが非常に複雑で、知られている解のほとんどは単純な引張負荷下での円形き裂に限定されたい。そこでこの解を基準解として、摂動法という数学的解法を利用してもう少し複雑なき裂形状のものが解けるのではないのか、と考えたわけである。そのために、毎日、毎日、式変形に明け暮れていた。本原稿の事の起りは、基準解のバリエーションを増やすための文献調査に始まる。

色々と文献を調べるなかで引張り、せん断、ねじりを受けるときの楕円形状き裂の応力拡大係数の完全な解が示された論文を見つけた。三次元空間において楕円面内とその外側の領域で境界条件が不連続に異なるような混合境界値問題を、複素関数とポテンシャル理論を巧みに利用して解いていたのである。私にとってその論文は非常に魅力的に感じた。著者名は単著で、Valery Fabrikant と記載されていた。以降、彼の名を V.F. と呼ぶことにする。私の関心は、彼の数学的取扱いに関心があったので、彼の所属についてはほとんど気にしなかった。その後、さらに彼の過去の論文を遡ってみることにした。すべての論文を読んで、「V.F. はかなり頭のいいやつだな。」と思うとともに、そこでやっと彼の所属が気になった。「V.F. はどこの大学の先生かな？」と。すると、

“囚人番号 167932D, ドナコーナ刑務所, ケベック州, カナダ”

と記載されている。「なんだ？これは」、とびっくりした。検索した文献の彼の所属をひとつひとつ見てみると、1992 年以前に公表されている論文では彼の所属がコンコルディア大学工学部機械工学科准教授となっている。ただし、彼自身よりも論文の内容に強い関心があったため、「？」はそのまま私の心に封印された。

それから数年経ち、2018 年 4 月号の雑誌「材料」で村上敬宜（ゆきたか、と読む）先生（元九大教授）が執筆された“破壊力学の歴史と今後の展望”という解説記事のなかで、つぎのような文章があった。以下、そのまま抜粋。

「著者らが STRESS INTENSITY FACTOR HANDBOOK, Vol. 3 を編集していた

とき、著者も同様な経験をした（この文脈は、V.F.とは関係ない）。カナダの Concordia 大学の V.I. Fabricant という研究者が度々手紙を送ってきた。自分の解を次回の出版の HANDBOOK(Vo.3)に載せてくれと執拗に要求してきたのである。研究のレベルは高いもので、私は掲載を約束した。ただ、それまでのやりとりは必ずしも容易なものではなかった。結果的には、多くの解が掲載することができたので、HANDBOOK の Preference に Fabrikant への謝辞を書いた。しかし、その日付は August, 26, 1992 という特別な日にしている。その日に、彼は 4 人の同僚の教授を射殺したのである。著者が HANDBOOK の Preference に Fabrikant への謝辞を書いたことで、多くの外国の研究者が「Fabrikant が殺人を犯したことを知っているのか。」という趣旨の手紙を送ってきた。その後、彼は刑務所に入ったが、彼の PhD の学生は Fabrikant の殺人は正当なものであったという 12 ページのレポートを書いて私に送ってきた。これによって彼の研究人生は終わったと誰もが思った。ところが、1994 年 12 月の J. Appl. Mechanics（米国の著名な国際雑誌）に彼の名前が付いた論文が載っているのを知り、大変驚いた。彼の住所は刑務所であった。」

これを読んで、すっかり忘れていた「？」を思い出したのである。ここから、彼そのものに強い関心をもつようになり、これを契機に彼自身に関する調査を開始した。おかげで、自宅の書斎は、現在執筆している幾つかの専門書の基礎資料の山と隣り合わせに V.F.に関する調査資料が山積するようになった。調査資料は、当時の新聞記事、裁判の公判資料、大学側での調査資料とその対処方法、あふれるインターネット情報などである。将来、これらの結果をまとめて本として出版してみたいと思っているので、ここではその詳細には立ち入らない。しかし、何があったのかについては簡単に紹介しておくことにしよう。私の興味はその他にある。

V.F.は非常に取り扱いにくい男だった。1979 年に旧ソビエト連邦ベラルーシからカナダケベック州に移住し、コンコルディア大学に職を得た。大学に就職するために彼が提出した書類は立派なものであり、ソビエトの著名な学者のもとで学位を取得した後、様々な大学で職を得ていた。多数の業績とその内容が優れていることを認めた学部長は、彼を助手として雇用することにした。雇用後、早速、彼はさまざまな争いや暴力的な行為を始めるようになる。職員、同僚、学生から大学側に多くの苦情があったにも関わらず、準教授として昇任された。研究費も支給されるようになった。しかし、その後も彼の攻撃的な態度は改まらず、大学側は彼に解雇の意向を伝えた。事件はその直後に発生したのである。1992 年 8 月 24 日午後 2 時 30 分、彼は機械工学科事務がある建物に乱入し、拳銃を乱射した。これにより 4 名の同僚が射殺された。彼は法廷で「俺

の生存権をあの連中が奪いやがった」と意味不明な内容を傲岸な態度で主張したそうである。その後の審理において弁護士 10 人をクビにし、言動も支離滅裂、とても大学教員とは思えない言葉使いだったらしい。公判中、判事が「お前は頭がいかれている。」と呟いたそうである。審理は一旦中止され、精神鑑定が行われた。その結論は「かなりのパラノイアだが、責任能力あり」となり、V.F.は 4 件の殺人で有罪となり、終身刑が言い渡された。

彼の病名は明らかにされていないが、資料から類推すると強度の妄想性パーソナリティー障害 (PPD) と考えられる。ベラルーシでの彼の生まれ育ちについてはよく分からないが、知的レベルは非常に高く、相当早熟だったと思われる。ただし、幼児期に親類を含む身近な人たちから暴力あるいは虐待的な行為を受けたことは間違いない。早熟かつ知的レベルが高い人は、総じて内向的であり (無論、全員ではないが...)、妄想する癖がある。このような癖の人が外部から強い刺激 (攻撃) を受けると、脳内でネガティブな反応を引き起こす。という訳で、過去に天才と言われた科学者の精神病理に私の関心が向いた。わき道にそれるが、ニュートン、ヤング、ダーウイン、フロイト、ウイナーなど天才学者として知られるが、現代の精神科の先生からは躁鬱病、パーソナリティー障害と診断されるであろう。誰とは言わないが、現代の法律のもとで裁かれたとすればそのうちの何人かは監獄の人であることは間違いない。

話を元に戻そう。V.F.は獄中で、1996 年から 2021 年にかけてなんと 60 本近くの学術論文を発表した。さらに、偏微分方程式の数学的解法やポテンシャル理論に関する専門書も数冊執筆した。私が目にした論文は、彼が獄中で書き上げたものの数本だったのである。結局、彼は、社会的自由と引き換えに刑務所内で純粋な科学研究を行う十分な時間を手に入れることになった。三次元き裂問題の数学的解析については、獄中の壁面に発生していたコンクリートのひび割れに着想したそうである。これを知ったコンコルディア大学の学長は、「自由を失った人間は、科学に貢献する権利も失っている」と公共の場で激怒した。しかし、彼は獄中で複雑な式を変形し続け、論文を書き続けた。投稿された論文は編集者の判断を受けて著名な学術雑誌にすべて掲載された。一部の学術雑誌の編集者は言う。「V.F.の論文は健全であり、科学の進歩に確実に貢献している」と。

我が国においては科学者の倫理、行動、信条が配慮されるようになっている。一方、欧米では反モラル的な行動をする科学者が社会から強い制限を受けて、将来の科学的進歩を停滞させてはならない、と主張する学者、評論家は実に多いのも事実である。この問題を野球の選手に置き換えて考えてみると分かりやすいかもしれない。あるプロ野球の選手は投手として抜群の成績を収めている。しかし、彼の私生活はメチャクチャなものであったとしよう (現実にもありそう

な話だ)。日本であれば、マスコミから良からぬ態度である、プロの選手として道徳観に欠けている、といって彼は永久に野球界から追放されるであろう。これに対して米国であれば野球選手とその人の私生活は別なものと割り切る。視聴者は、素晴らしいプレーを見たいのである。

倫理観と生産性をどのように両立させるのか、大変重要な問題だと思う。それにしても世界にはいろいろな人がいるものである。

最後に。彼の獄中で執筆した専門書

「Applications of Potential Theory in Mechanics」の Preference の最後に書かれていたつぎの文章を紹介して本稿を終わりにしよう。

The author is grateful to Professor J. R. Barber from Michigan, Professor B. Noble from England, and Professor J. R. Rice from Harvard who agreed to read the manuscript and expressed their opinion.

The book contains so much new material that some misprints and errors are inevitable, though every effort was made to eliminate them. The author would be grateful for every communication in this regard. All the reader comments are welcome. The address is

V. I. Fabricant
Prisoner #167932D
Archambault jail
Ste-Anne-des-Plaines
Quebec, Canada J0N 1H0

さらに本問題に関心をもった学生は以下の You Tube 動画を見てもらいたい。

[The Disturbing Case of Valery Fabrikant - YouTube](#)